

「祈りによらなければ」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

February.22.2026

## エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

### Preface

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、この暗闇の世界の支配者であるもろもろの悪霊に対するものであり、悪魔の策略に対して堅く立つことだ」と説くエペソ書 6 : 10 - 13 の御言葉をもって説教を取り次ぐのが、今日で 6 回目になります。

もしかしますと、「え、またこの聖書箇所なの？」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。

私がエペソ書の御言葉を取り次ぐにあたって参考書のように用いていますマーティン・ロイドジョーンズという牧師先生の説教集があるのですが、全 8 巻で構成されていて基本 1 章分が 1 巻の本になっています。

ところが、このエペソ書 6 : 10 - 13 のたった 4 節分の御言葉の説教は 26 編にもなり、本 1 冊分を擁する程に重点的に語っています。

つまり、それほどに、私たちイエス・キリストを信じるクリスチャンたちにとって、またはすべての人間にとって、私たちの格闘が血肉に対するものではなく、悪魔の策略・もろもろの悪霊に対するものであるという認識が重要なんだということです。

聖書 66 巻、2000 年もの歳月をかけて書かれたこの聖書という書物も、悪魔が人をだまらせたという事実を最も深刻で悲惨な事件として扱いながら聖書の最初である創世記を記し、そして、その悪魔が滅ぼされる将来について語ることをもって聖書の最後である黙示録を終えています。

にもかかわらずです。

聖書の語る深刻さとは関係ないかのように、現代という時代に至るにつれ、世の終わりが近づくにつれ、私たちの戦いが血肉に対するものではなく悪魔の策略もろもろの悪霊に対するものであるという認識が弱まっているばかりか、ファンタジー化、実際には存在しない物語や幻想化されていることを注意深く探る必要があるように思います。

### Part One

私たちの世界が現代化し文明化すればするほどに、神を信じるということ、イエス・キリストを信じるということをこの社会が作り出した常識的範囲内に留めようとし、所謂科学という見地に収まる範囲内で受け入れ、その範囲内に留めて置こうと収めようとしているかのようです。

または、倫理道徳的にどうなのかという人間側の行いや言動という枠内に収

め、神ではなく、私たち人間を根拠にしたモラルや、人道的にどうなのか、道義的にどうなのかというただの宗教活動に落とし込めようとする力が、私たち自身の中で働いているようにも思います。

つまり、口では、「父なる神様、主イエス様」と言いながら永遠のいのちを主張はするものの、その生き方や方法や考え方においては、至って世的な方法と見方と戦い方になっている。

要するに、祈らなくなっている。

祈らないでやり過ごしている。

祈るという行為をおっくうに思っている。

祈るという超自然的な行為の重要性を認識出来ていない。

祈るという神の前であつての棚卸しや遜りよりも、自分が上になっている。

祈りよりも自分が上になっている。

祈りがすべてであることを覚えられずに、「祈ることしか出来ないからね…」なんていう祈れるという特権を、主なる神様を馬鹿にしたような表現を当たり前のように使いながら、祈りよりも自分を上にしている。

祈りが最善だと思えてない。

祈りはおまけ程度のもので、祈りよりもよっぽど役に立つものがあると実際に、事実上思っている。

そして、祈らない。

そして、事実上神を忘れている。

祈らないということは、結局、私たちの信仰生活という現場の中で、霊的戦いを放棄し、世的な尺度で、世的な戦いをしてしまっているということになってしまうんだと思います。

聖書は、「祈らないように仕向けていくことこそが、サタンの大きな策略のうちの一つだ」と教えて下さいます。

聖書の中の福音書を見ますと、かつてイエス様が、悪霊につかれた子どもから悪霊を追い出すことが出来ず癒すことが出来なかった弟子たちに、「こういったものは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことが出来ません」と話されたことがあります。

即ち、神に全面的により頼むという行為・姿勢である祈りを忘れるということは、物事に働いている悪霊を見出すことが出来ないばかりか、霊的戦いではない戦いをしてしまっているということです。

プライドの戦い。

どっちが正しいのか、悪いのかの戦い。

自分のすごさを見せつけたい戦い。

自分はやっている、自分は分かっている、自分は判断出来る、自分という人を人に認めさせる戦い、認めてもらいたい戦い、自分は祈るなんていう行為なんか必要もない立派な人間だということを示したい戦いに陥っているというこ

となんだと思います。

実際に弟子たちは、祈るという神に全面的により頼む行為や考えにさえ及ぶことは一切なく、ただ自分たちがイエスの弟子であるというプライドと名分だけで、その場をやり切ろうと、何とかしようとして、イエス様から間違いの本質を見抜かれ指摘されました。

### マルコの福音書 9 : 14 - 29 (パワポ)

弟子たちは祈りませんでした。

祈る代わりに、論じ合いました。

論じ合うことをもって、自分が知的な人であるということを人々に示したかったのでしょうか。

それとも、人と論じ合える自分の知性や知的な姿に酔っていたのでしょうか。

結果、悪霊を追い出すことも出来ず、この世を生きていく上で培われてきた考えや力や知識や経験にいつの間にか縛られて、霊的戦いではなく血肉の戦いをするよう誘われ、物事の霊的本質を見抜くことが出来なくなっているという悪魔の策略と自分たち自身の姿にも気付けなくなっていたようです。

「ああ、不信仰な時代だ」とイエス様仰いましたが、不信仰な時代は、祈りません。

「神を忘れる」という不信仰な時代に、いつの間にか染まっていました。

「神を忘れない」という人にとって最も大事なことを忘れていることにも気付き得ませんでした。

祈らないのです。

2000年前も既に不信仰な時代でしたが、2000年経った今はどうでしょうか。

信仰的な時代でしょうか。

または、もっと不信仰な時代にはなっていないでしょうか。

どういう意味で？

祈らないという意味です。

## Part Two

文明が進めば進むほどに、物事全てが可視化されていると錯覚し、目に見えるもの以外は信じなくなり、目に見えないけれども唯一確かな神様でさえも不確かな存在とし、目に見えない神に祈るという行為を無力なもの意味なきもの、または、ちょっと心を和ませる心理セラピー的な効果がある程度だと見なし、結局はお金であり、権力であり、武器であり、学力であり、どれだけ物を持っているか、どれだけ注目を集めたかにかかっていると、物事全てを霊的戦いではない血肉の戦いという虚無しか残らないような戦いに終始させてしまう、終始してしまっていないでしょうか。

血肉の戦いに終始させられ、終始しながら、本質を見失うよう仕向けられ、その仕向けの中にいつの間にかどっぷり浸かってしまっていることにも気付かないかのようなのではないのでしょうか。

これまで何度か紹介させて頂きましたが、C.S.ルイスの著書「悪魔の手紙」の中で、悪魔の上司が悪魔の部下に書き送ったクリスチャンたちに祈らせないためのアドバイスを送っている文章の中にこんな言葉があります。

「一番いいことは、できれば**患者**にまじめに祈ろうとする気持ちを全然持たせないことである。彼らが**敵**に注意を向けている時はいつも我々の負けである。そうさせない一番簡単な方法は、**彼**を見つめずに自分自身を見つめさせることである。自分を造った**かた**に向かってではなく、自分が作った物に向かって祈らせておくようにしなければならない。」

まんまと悪魔の策略にハマって、まじめに祈ろうともせず、神に注意を向けようもしない。

イエス様を見つめる代わりに自分自身を見つめ、自分をお造り下さったお方ではなく、私が作った物、お金、作品、論文、経歴、経験、知識、自分史に向かって祈るように仕向けられている。

悪霊を追い出すなんていう考えもなく、悪霊を追い出すことが出来ていない理由さえも分からなくなっている。

イエス様を見つめ、イエス様を見上げ、イエス様をお招きし、イエス様を思い、イエス様に聞き、イエス様に語ることのためには時間もなく、お金もなく、体力もなく、余裕もない不信仰な時代を生きるよう、悪魔によって誘われていることに、どれほどの霊的自覚を私たちは持てているのでしょうか。

「この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことが出来ません」というイエス様のお言葉の深刻さ重要性を、私たちはどれ程に認識出来ているのでしょうか。

## Part Two

ヘンリー・ナウエンという方が書いた（まだ日本語には訳されていない本ですが）「**With Open Hands**」「開かれた手で」という本の中で、ヘンリー・ナウエンはこんなことを言っています。

「祈る時、両手を開きなさい。開いた手で、開かれた手で祈りなさい。」

じゃ、「両手を開く、開いた手で祈るとはどういうことなのだろうか？」と考えてみました。

まず第一に、開いた手とは、執着を下ろす、執着を下ろした祈りなんだと思います。

両手を広げるといのは、握りしめている手を開く、解くということです。

「握りしめたこぶしでは祈ることは出来ない」とヘンリー・ナウエンは言いますが、私たちの握りしめた手は、所有しようとする欲、支配しようとする意

志、隠そうとする恐れ of 象徴なんだと思います。

両手を広げるといふのは、執着を下ろし神様に祈るといふことでしょう。

自分への執着を下ろすこと。

私たちは、執着を捨てると生きられないかのように感じるがありますが、意外にも時間が経ってみると、あんなにも握りしめて手放そうとしなかったものが、どれだけあつてなく、とりとめもなく、あてにならない、空しいものであつたのかを悟るようになる時があります。

むしろ、その執着のために、もっと大事なものがあつたのに、その大事なものを失ってしまつていたといふことに気付くことがあります。

2番目に、開かれた手で祈るといふのは、静まって祈るといふことなんだと思います。

祈りは、隠れたところにおられる神との語らいであり、神との親密な交わりです。

祈りは、求めることでもあると思いますが、同時に、神の声を聞く行為でもあります。

神の声を聞くためには、立ち止まらなければなりません。

静かに静まり黙想し、御言葉を思い巡らした時、私たちは、主イエス様のかすかで細いけれども、きらきらと輝く確かに本質を突くかのような声を聞くことになるでしょう。

静まって祈った時、神の声を聞く耳が開かれます。

開かれた耳を通して神の声を聞いたならば、心が開きます。

静まり祈る時、神のご臨在の中に入ることが出来、神のご臨在のうちにいることが分かるでしょう。

私自身、日頃祈りながら思うことは、「どこにあつても、目をつぶり、静まって『主よ』と祈ると、そこが天国になる」といふことです。

尊敬する神学校の先生が、こんなご自身の祈りのような詩をお書きになったことが思い出されます。

「祈る時、その時間が終わってしまうことが名残惜しい。祈りを終わらせなければならぬことが名残惜しい。祈りをもって主の臨在の中に居続けたい。でも目を開けて、今立って行かなければならぬ。目を開けて立って出て行くのも、祈りのうちの一つだから。」

ヘンリー・ナウエンも、「祈るための静まりは、神の言葉が住まう家であり、神がおられる空間だ」といふ。

また静まって祈ると、「愛している」といふ神の声に耳を傾けるようになります。

「愛している」といふ神の声は、イエス様ご自身もバプテスマのヨハネから

洗礼をお受けになられた時、お聞きになった声でもあります。

### マタイの福音書 3 : 16 - 17 (パワポ)

私たち人は、自分が愛されていない者だという傷を抱きながら生きていきます。

その理由は、この世と悪魔がささやいてくる偽りの声と誘惑のためです。

この世と悪魔は、私たちが愛されている者だという「証拠を見せろ」と言います。

悪魔はイエス様に向かっても、「証拠を見せろ、根拠を見せろ」と誘惑しました。

「お前が父である神に愛されているなら、石ころをパンに変えてみろ。神殿から飛び降りてみろ。世の権力を手にしてみろ」とですね。

でもイエス様は、そのような証拠や根拠を提示する必要が全くありませんでした。

なぜならば、もう既に、父なる神の声を聞いておられたからです。

「わたしはあなたを愛している。わたしはあなたを喜ぶ」という神の声です。

私たちも同じです。

私たちは皆、神の愛を受けている者たちです。

毎朝、毎昼、毎晩、毎日、真っ先に聞かなければならない声が、正にこの声です。

「あなたはわたしの愛する息子。あなたはわたしの愛する娘。わたしはあなたを喜ぶ」という声です。

### Part Three

3番目に、開かれた手は、安息の祈りです。

手を握りしめていると緊張します。

何かに執着していると緊張が深まり、呼吸が荒くなったりもします。

手を握りしめたこぶしは、まかり間違うと暴力に変わることもあります。

でも、手を開くと、神の安息に入ります。

緊張がほぐれ、平安が訪れます。

最近ふとした時気付かされることがあります。

それは、いつの間にか、緊張の中を生きているということです。

何を通して知ったかと言いますと、以前はそんなことなかったように思うのですが、ちょっとしたことでビクッと過剰に驚いてなんだかいつもビクついていることに気付きました。

そして今は、手を開き、神様の前に静かに出て行くことを持って、緊張を解こうとしています。

まだ開き切れていない手を開こうと、力を抜こうとしている最中、練習中です。

そうして、たましいの手を開いて力を抜くと、キリストによって生かされま

す。  
聖霊なる神様が働いて下さいます。

ちょっと立ち止まって安息を取ることは浪費ではなく、音楽の美しさが休止符に表れるように、人生のリズムは安息によって整います。

定期的な安息の祈りは、私たちの霊を主にあつて回復させて下さいます。

四つ目に、開かれた手は、差し出す、差し上げる祈りです。

神様に差し出す、差し上げるとは、神様に委ねる、お任せするというこ

とでしよう。  
握りしめている手では、何も差し出すことも、委ねることも、献げることも出来ません。

両手を広げた時、私たちは神様に重荷を委ねることが出来ます。

私たちが大切にしている物を、大切にしている人をお委ねすることが出来ま

す。  
神様にお委ねすることが最も安全で、天に宝を蓄えることが唯一永遠です。

例えば、アブラハムは、年老いて生まれてきた息子イサクを愛しました。

ところが、その息子に対する愛着がいつの間にか執着となり、その執着は不安を生み、不安は悩みとなり焦りとなって行きました。

アブラハムは、ふとした瞬間から、神よりもイサクに執着するようになっていたわけです。

その時、主なる神様はアブラハムに、「イサクを全焼のささげものとして献げなさい」とお命じになりました。

「その握りしめている手を開きなさい」とお命じになりました。

「その執着があなたを苦しめている」と、「わたしはあなたがわたし以外のものに執着して苦しんでいるのを見ていられない。わたしはあなたがわたし以外のものに執着することを忌み嫌う」とお語りになりました。

すると、アブラハムは手を開きました。

手を開いて、モリヤの地にある山で、神様に、イサクを神への全焼のいけにえとして差し出す、差し上げる、献げることを決意しました。

そして、イサクを献げようとするその瞬間から、アブラハムは自由を得ます。まことの自由を得ました。

もちろん、イサクも神様はお返し下さり、イサクも両親の執着から自由になり、主なる神様の知り尽くしがたく、極めがたい愛を知ったんだと思います。

私たちの主なる神様は、私たちがお委ねしたことの責任を取って下さいます。

私たちが神様にお委ねしないなら、私たちが責任を取らなければなりません。でも神にお委ねするなら、神様が責任を取って下さいます。開かれた手は、神に差し出す、お委ねする祈りです。

そして最後に五番目、開いた手は、受け取る祈りです。握りしめていると、受け取ることが出来ません。でも、両手を開くならば、神様は、その開いた手に恵みを与えて下さいます。豊かな祝福を与えて下さいます。

空になった時、満たしがあり、満たしがあった時、分かち合いが生まれます。空になったら満たし、満たしたら分かち合うというのは、神様の美しい循環の法則なんだと思います。

ヘンリー・ナウエンは、「受けることが、与えることよりも難しい」と言います。

神様は、私たちがまず先に受けることを望んでおられるように思います。

私たちは、救いを受け、恵みを受け、愛を受け、力を受け、神様は、私たちが求めた時、「上げたい、与えたい」と思っておられるように、聖書を読むと感じます。

問題は、私たちが祈らないということです。

祈りを通して与えられた分だけ分かち合うことが出来、施すことが出来ます。

祈りは、受けた分だけ分かち合うことの出来る道なんだと思います。

祈りは、私たちが生きて働くための源泉であり、たましいの宝です。

祈りは、父なる神様、御子イエス様、聖霊なる神様の天の宝を受ける鍵です。

受けるということは受容ですが、受容は、従うということの別名でもあるように思います。

御使いガブリエルが、処女マリアのところに来て、聖霊なる神様によってイエス様を身ごもったことを告げましたが、その神の言葉を受け入れることは、とても危険なことでした。

当時、まだ結婚をしていない女性が子を宿すということは、律法の定めによって石を投げられ、殺されかねなかったからです。

それでもマリアは、危険を承知の上で、神の言葉を受け入れました。

### **ルカの福音書 1 : 38 (パワポ)**

マリアは、両手を広げて、神の御心を受け入れました。

その瞬間から、神の驚くべき救いの御業が始まって行ったわけです。

## Conclusion

この暗闇の世界の支配者たち、もろもろの悪霊どもは、私たちが毎日、両手を広げて神に祈ることを全力で妨げようとしています。

もっとも端的な悪魔の策略は、私たちに祈らせないことです。

悪霊につかれた子を前にして、人と論じ合うことはするものの、神に祈るということを忘れた弟子たちは、まんまともろもろの悪霊の策略にハマったということになるのでしょうか。

でも大丈夫です。

そこで、祈ればいいのです。

気付いたら、教えられたら、祈ればいいのです。

祈りを止めることは出来ません。

祈らないように仕向けていくことは出来ますが、祈らないようにすることは悪魔には出来ません。

だから、祈りましょう。

「この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません」というイエス様の言葉を深刻に、真剣に受け止めて祈りましょう。

祈りを邪魔をしても、祈りを止めることは、悪魔には出来ません。

そして何よりも、私たちの愛する主なる神様が、主イエス様が、また私たちのうめきとともに一緒に祈って下さる聖霊なる神様が、私たちの祈りをご自身にとって最もかぐわしい香りとして喜び、待っていて下さっています。

祈りましょう。

祈りによって、格闘していきましょう。

その格闘に、主が、知り尽くしがたく、極めがたい恵みを注いで下さることでしょう。

お祈りいたします。

祝祷：マルコの福音書 9 : 29